第二の故郷ラボック
－Dasgupta研究室への留学－

愛知工業大学　手嶋　紀雄

1. カエル，カエラヌ

2003 年 8 月 1 日の深夜，アメリカで住むことになるアパート Park Terrace にスーツケースを運び入れ, ほっと一息もつかの間，当時 3 歳の娘が「カエルぅー！」と叫んだ。トイレの便器の中にこぶし大ほどのカエルが居たのだ。空港に迎えに来てくれた方（その後もいろいろとお世話になった竹内政樹博士，内田光恵さん）が「流しちゃえー」と一言，そのカエルは“ カエラヌ ”人となった。今頃彼は. . . 。本誌 17 巻に田中秀治先生（徳島大）による Dasgupta 研滞在記が掲載されている（*JFIA*, **17**, 207 (2000)）。田中先生も Park Terrace に住まわれたそうであるが，カエルには遭いましたか？

2. テキサス州ラボック

ラボック（Lubbock）市は，テキサス州の北西部にある人口 20 万人ほどの都市である。市名の由来は，南北戦争にさかのぼる。当時の警察組織であるテキサスレンジャーズの一員で南部同盟の大佐であった Thomas S. Lubbock にちなんでいる。綿花栽培が今でも盛んで，ラボック国際空港に降り立つと綿花畑が周りに広がっている。雨は少ないが，オガララ帯水層（Ogallala Aquifer）からの地下水が豊富である。写真 1 はかつて地下水を汲み上げていた風車を残している記念館で撮った写真である。

3. Dasgupta 教授（Sandy）の人柄とテキサステック

ラボック市の北西部に広大なキャンパスをもつ Texas Tech University（http://www.ttu.edu/）がある。現地の人は略して“ テック ”と呼んでいる。私は，テックの Department of Chemistry and Biochemistry に所属する Purnendu K. Dasgupta 教授（ニックネーム：Sandy）の下でポスドク研究員として 1 年間滞在する機会を得た。写真 2 は，Sandy 宅パーティでの一コマである。Sandy は仕事には人一倍厳しいが，写真のように子供が大好きで人一倍心が温かい方である。研究室のメンバーでささやかな Sandy の誕生日パーティーを開いたときに, コメントを求められて涙ぐむシーンもあった。仮にぼくが学生に誕生日パーティを開いてもらったとして，涙ぐむだろうか. . . 。

テックに係わる人たちは写真 3 にあるようなハンドサインをよく使う。これは“Guns Up”と呼ばれるサインで，Red Raiders というテックのアメフトチームが対戦相手を撃ち落とすという意味をもつらしい。キャンパス内のアメフトスタジアムに熱狂的なファンが詰めかけ，このサインを掲げて応援していた。このサインはスポーツの応援の時だけ

写真 1　American Wind Power Center（ラボック市内）にて

写真 2　Dasgupta 教授（Sandy）宅パーティにて．Sandy に抱っこされて泣き出す我が子.

写真 3“ Guns UP ”サイン．Caprock Canyons 州立公園にて．

ではなく，例えば守衛のおっちゃんもテック関係者の車が通るとき，ドライバーに向かってこのサインをする。私も“にわかテック人”として，通勤のときに車内からニコッと笑って Guns Up しながら守衛室の前を車で通過することが習慣となった。

4. アメリカに居るんだなと思ったこと

アメリカに来たと実感したのは，Social Security Number（SSN，社会保障番号）に代表される徹底した個人情報の管理である。運転免許やクレジットカードの取得時，銀行口座の開設時，月々の給料を小切手でもらう際など，ありとあらゆる場面でこの番号を聞かれた。個人の管理は危機管理と密接につながっている。いくつもある研究室の部屋の鍵がすべて，研究室の学生を含めて全員に配布（販売）される。鍵を廊下のロッカーに入れておき，研究室皆で共有するという著者がこれまでしてきた日本的でルーズな習慣はなかった。

もう一つ実感したと言えば，インスタントラーメンの袋の裏を見たとき。できあがりの絵にラーメンどんぶりとスプーンとフォークが描いてあった（写真 4）。「やっぱりラーメン食うには箸だろ」と思う日本人は著者だけだろうか。

5. 研究成果

2 つのテーマに従事した。【1】熱高効率ミクロフロースルーヒーターの開発，【2】呼気アセトンの自動計測法の開発である。【1】では，内径 0.7 mm のテフロン細管内に白金黒の極細ワイヤーが通されており，管内を流れる溶液を電気的に直接加熱する原理をもつ。ミクロ反応場における化学反応の促進や試料熱分解への応用が可能である（Anal. Chim. Acta 誌 510 (2004) 9-13 に公表）。【2】では呼気を拡散スクラバーに送り込むことで，呼気アセトンが定量される。代謝アセトンと糖尿病は密接に関連しており，臨床検査において望ましい非侵襲法としての応用が期待される。つい最近同誌への掲載が受理された。著者最近のハッピーなニュースである。

6. もう一つの成果

研究成果もさることながら，異なる文化圏で家族と過ごせたことは，私にとって貴重な体験である。このことは，この留学で得た何にも代え難い成果である。妻は，週 2 回の英語勉強会で，上の娘は幼稚園でたくさんの友達と時間を共にした。2 歳の下の娘には記憶が残らないかも知れないが，姉妹で英語混じりの遊びに忙しかった。写真 5 は Sandy 研の集合写真である。この研究室のメンバーと苦楽を共にし，世界につながりを持つことができた。また偶然にも 2 人の日本人研究者（戸田敬先生（熊本大），竹内政樹博士）ともメンバーとして過ごすことができ，著者にとってこれほど心強いことはなかった。また，ラボックに住む数少ない日本人の方とも知り合うことができた。ラボックは，私たち家族の“第二の故郷”である。

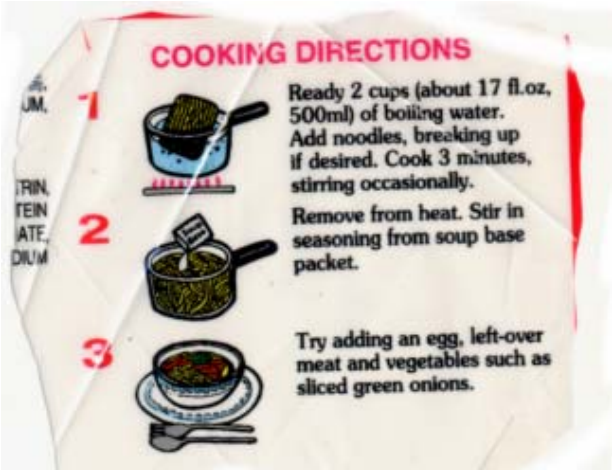

写真 4　現地で買ったインスタントラーメンの切り抜き．フォークとスプーンでは，気分が出ない．

写真 5　Sandy 研メンバー．
前列左から：Rahmat, Vince, Dr. P. Kuban
中列左から：著者, Kalyani, Prof. P.K. Dasgupta, In-Yong
後列左から：Dr. K.-D. Jo, Dr. J. Li, Qingyang, Ademola, Dr. M. Takeuchi, Dr. K. Toda, Kavin, Dr. Z. Genfa
（Jason はこの写真のとき来ることができませんでした）

さて，ラボックを去る数日前に，アパートのプールの近くで，でっかいカエルに遭遇した。“彼”がまた新しい住居人をトイレで迎えるためにやってきたに違いないと思った。

謝辞

私の留学のためにご尽力頂いた酒井忠雄先生（愛知工大）に深甚の謝意を表します。また田中秀治先生（徳島大），高柳俊夫先生（岡山大），戸田敬先生（熊本大），竹内政樹博士（TTU）には留学前から現地に関する情報をお寄せ頂き，大変助かりました。最後に，Dasgupta 教授を始め，研究室のメンバーに感謝申し上げます。